

私たちの暮らしと社会をどう観察し、 どう変化させてゆくか？

～ソローが考えたようなことを150年たった今、私たちが考える～

パネリスト

今泉吉晴・稲本 正・澤田裕二

進行役

青木将幸 (エコのもりセミナー事務局)

青木：「私たちの暮らしと社会をどう観察し、どう変化させてゆくか？」というタイトルで、ソローが考えたようなことを150年経った今、私たちが考えるということで、話を進めていければと考えおります。ご登壇いただいているのは、基調講演をいただきました今泉さん、問題提起をいただきました稲本さんと、もうお一方は澤田さんです。

まず、澤田さんのご紹介から始めていこうかと思えます。澤田さんは普段、何をやっている人ですか。

澤田：普段は、お二方の先生と違って、展示デザインの仕事をしています。今は「愛・地球博」の催事のディレクションをしています。



『森の生活』を読んで

青木：『森の生活』は読まれましたか。

澤田：昨日、やっと読み終わりました。実は青木さんからお話をいただくまで、存在も知らなくて、非常に恥ずかしかったのですが、読書は苦手で、こんな厚い本は「ハリー・ポッター」以来でした。

青木：会場にも『森の生活』を読んでみて、大変苦しかったという方が多くいらっしゃるかもしれませんね。ゲストのお二人も含めて全員にお聞きします。『森の生活』を読んで挫折した経験のある方、どれくらいいらっしゃるでしょうか。たくさんいらっしゃいますね。最後まで読み切ったという方は？ いらっしゃいますね。これから読もうとする方もいらっしゃるかもしれません。

向こうのテーブルは、30年も前にソローの本を読んで、自らオークヴィレッジをおつくりになったり、山小屋を持ったりして、『森の生活』をすでに実践されている方です。こちらのテーブルは都会のテーブルといえましょうか、普通に都会に暮らして、『森の生活』を読むのが大変だったという視点から、ディスカッションを組み立てていけたらと思っております。

澤田さん、読んでみての感想はいかがですか。

澤田：『森の生活』は、ソローが27歳のときだったというのはすごくびっくりしました。非常に新鮮だったのですけれども、なぜ27歳だったのか、お二方に聞いてみたいと思うのですが、時代がそういう時代だったのかなという気がしています。最近、いろいろな文学賞を非常に若い方がとられているので、もしかしたら日本がソローの時代のようになっているのかなと思ったということが一つです。

それから、すごく読みやすく、読んでいて腹が立ちました。「なんだ、このソローってやつは。もっと簡単にわかりやすく言えばよ。3行でわかるだろ」と思ったのですが、読んでいくと、私が愛知万博でやっているアートの世界に非常に近いなと思いました。わかりやすいことを直接言葉にして単純に情報として伝えるのではなくて、非常に比喩的に使っていくことで、人間の感情、心に訴える。正確な情報ではないのだけれど、なにか心に訴えて、受けた側がそれを勝手に理解して、イメージーションを膨らませていくとより深い理解が生まれるというのが、私がやっているイベントアートの世界ですが、もしかするとソローはそのあたりをねらったのではないかなと思いました。アートは非常にわかりやすく

澤田 裕二 株式会社SD代表

1957年東京生まれ。明治大学建築学科卒。博覧会デザイナー・プロデューサー。展示演出デザイナー・プロデューサー。モーターショーなどの大規模イベントや世界リゾート博覧会、山陰・夢みなと博覧会、山口きらら博などのデザイン、プロデュースに関わる。現在、愛知万博の催事ディレクターを担当している。「森の文明」を持つ国である日本から、独自の発信をすべきと考えている。



て、ほくもあまり好きじゃないんですけども、そういうことがこの本の特徴かなと思って、最後まで頑張りました。

青木：これはひとつのアートですか。

稲本：ソローはけっこう比喩が多いんです。それはエマソンという先生の影響もあったと思います。友達がいっぱいいて、森の生活をやる時にも、チャニング（ウィリアム・エレリー・チャニング）という友達と一緒に家を建てたりしています。エマソンは有名な人で、漱石のように人を集め、ソローはさしずめ芥川龍之介といったような位置ですね。けっこう若気の至りで、何か新しいことをしたいな、ということはあるんですよ。そういうふうに理解すれば、よくあることじゃないかなという気がします。

青木：27歳でこれを書けてしまったのはそのへんにも理由があるんでしょうか。

稲本：漱石は、大学院のときに『方丈記』を訳しているんです。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶ泡(うたかた)は、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためし無し」なんて難しいものを、よく英訳したと思うんだけど、昔の人は早熟だったんですよ。人生は短くて、50歳ぐらいで死ぬんだから、27歳といえれば半分過ぎているわけです。

青木：不思議ではなかったという感じなんですかね。

稲本：私がオークヴィレッジをつくったのは同じ27~28歳ですけど、これを読んで負けちゃダメだと思いましたね。やらなきゃ時間がないだろう、と思っていました。

青木：この会場の参加者は、女性は20代がいちばん多く、男性も20代が多いですけど、近い世代の人間がここまでやるというのはちょっと焦りますね。

稲本：特に女性が多いというのは、日本の男はヤバイな、女のほうがあてになるなと思う。うちの会社も若干そんな傾向があります、ぜひ女性も頑張してほしいと思います。

今、自然学校は全国にあるんです。いくつか質問があって、ちょっと答えきれないものもあるんですが、オークヴィレッジな



りトヨタ白川郷自然学校では実習生をとっているんで、そういうところで具体的に実践してみたほうが答えになるようなことが多いような気がします。ここで答えてもしょうがないな、という質問がけっこう多い。だけど、やる気があるのは、すごくいいことだと思います。

青木：今泉さん、初めて『森の生活』に出会った瞬間のことは覚えていらっしゃると思いますけれど、おいくつぐらいのことで、どういうふうに感じましたか。

今泉：学生のときだったと思いますけれども、「森の生活」という題に憧れましたね。すばらしい本があるな、と思いましたけれども、読んでみたらちょっと読めなかったんです。あまり楽しくないと思いました。でも、今、自分で訳して、訳す意味があるなど思ったのは英語で読んでみたら楽しかったからです。

学生のときから自分で訳してみようと思うまでに40年ぐらい経過しましたが、それはどうしてかということ、私は動物学をやっていますので、英文学の方がこんなにちゃんと訳せないとは知らなくて、もともとつまらない本なんだろうと思っていただけなんです。あるとき、たまたま英文で読んでみたら、狩りのことなどが出てきて、とても楽しい話で、それでやってみようと思ったんです。そういうことで、物事には時間がかかるというのが私の感想です。

ソローがアーティストであることは間違いないんですけども、今、読む側のわれわれの場合、学問が分業化され、ものすごく分割されていて、動物学といったって動物学をまるごとできる人は1人もいません。たぶん動物学を学んでも、イヌの本なんか書けないでしょう。そのくらい分割されて、ネズミの専門家とかモグラの専門家とか、さらにその生態とか、ものすごく細かいわけです。ですから、学者はほとんどソローの本は読めないと思います。ソローは暮らしのレベルで見えていますよね。

卒論をやる前の学生が、「森」について卒論を書きたいと言ったら、大学の先生に「そんなもの、まるごと扱ったら、どうなる。もっとテーマを絞れ」と怒られますけれども、むしろ「森全体を扱いたい」というほうが正常なわけです。大きな認識を得たいというのは当たり前ですけども、学問の世界では扱えなくなっています。それに対する批判としてソローを読まなければいけないので、私たち自身が大学で頭をダメにされているわけです。読めないというのは「読書人」じゃないからです。普段、読書している人は、ソローを楽しみ読めると思います。それは年齢に関係ないです。

「観察」について

青木：今日のディスカッションは、前半と後半でテーマを絞りながらやっていこうと考えています。前半は「観察」をとりあげていきたいと思います。「じっくり観る」ということをソローはやってきたわけですが、150年経った今、それぞれのゲストは、この社会をどういうふうに観ているのかということ、ぜひ伺ってきたいと思っています。

後半は「実践」ということで、たくさん質問をいただきました。「森の生活」を今、実践するにはどうしたらいいのか、という質問が多く寄せられていますので、このへんの課題に立ち入ってきたいと思っています。

澤田さん、愛知万博の仕事をしていらっしゃるなかで、ニホンザルが登場してくるという話を聞いたことがあるんですが。

澤田：万博の会場は非常に起伏が多くて、ため池もいっぱいあって、そのいちばん大きな池で、毎日、ナイトイベントをやります。大きな水循環の一部でもあるのですけれども、その水中から高さ15メートルのニホンザルの頭が出てくるんです。これは、びっくりさせようということもあるんですが、演出家はアメリカのロバート・ウイルソンという方で、この方がニホンザルがよいと提案されたのです。先進工業国でサルがいちばんたくさんいるのは日本だということです。それと、人間だけで物事を考えているから文明はおかしくなるので、「人間が自然から見られているという視点」を持てば、もっとバランスがとれるんじゃないか、というのが彼の主張です。私たちはニホンザルに見られている、毛が3本足りない、知恵を持った自然が人間の活動を見ている、というわけです。皆さんが「見られている」ということを、イベントのなかで再確認して、それを心に刻んで帰ってもらいたいというのが万博からのメッセージで、そのためのナイトイベントが毎日、夜、行われます。

青木：人間が自然界から観察されていることの象徴として。

澤田：そうです。ソローもそんなようなことを言っていますけれども、人間だけが見るのではなくて、人間が見られているという視点が重要だということです。

青木：よくわかりました。「観察」について、今泉さんにお伺いしたいのですが。ソローはものすごく観察をしましたね。アリのたたかいをじっくりと観察していますけれども、同時に、人間の生き方とか社会のあり方、働き方、どれだけお金をもらって、どれだけ苦勞しているのか、という

ころも観察したのだと思います。ソローにとって、観察はどういう意味があったのでしょうか。

今泉：観察というのは、モノを見るということですが、モノは見ようとしても全体は見えないわけですね。ですから、観察とは、足跡が一つあったら、そこにカワウソが来たとか、「大きな全体をイメージしていく作業」です。

ソローは、毎日4時間の散歩をしたといえますけれども、すごいことですよ。歩きながら楽しむことは、たいへんな頭の活動、精神活動でして、それを繰り返していくことで世界を知っていくということですから、その楽しみには非常なものがあります。ウォールデンにいたときの話ですが、ソローの場合、ひとつは自然に向かって森の散歩、もうひとつは村に向かって散歩で、村の散歩では、ちょうどブレイドックを観察するように人間を観察する、と言っています。まさにサルが見るのと同じようなことです。ですから、非常に大きな「人間的な精神活動」が観察で、世界が人間にいろいろな暗示を与えてくれるということだと思います。

ですから、都会でも「森の散歩」はできるわけで、森の痕跡はあちこちにありますが、並木の下にいろいろな種が育って、死んでいきますけれども、それは大変なことです。一本のケヤキの木が何万という種をばらまき、良い場所に育ったものは4月に生きてきますけれども、5年、10年経った木は1本もありませんよね。そういうふうには、モノは見れば見えてきて、生物の生きざまが大きくイメージされる。そういうことだと思います。

青木：なるほど。稲本さん、観察することはすごく大事なことだと思いますが。

稲本：私は『ソローと漱石の森』で書いていますから、省略しますが、デカルトは大きな間違いをした人で、「観察は人間側からしかできない」というのに近いことを言っているんです。「神」がいて、「人間の理性」があって、「理性ではない肉体」があって、そして「自然」がある、というふうに完全に分けた人でありますが、あるときから人間は観察を理性でするものだと思



い込んだ。それである程度はできるけれど、ある程度以上のことはできないということがわかってきました。

今、科学でも進化論がすごく問題になっていて、人間がいちばん進化していると思いついて、人間がいちばん進化しているのは昆虫じゃないかと言う人がいるんです。よくいわれますが、ノミが人間の大きさになると、東京都庁なんて軽く飛ぶんですよ。アゲハチョウはマイナス193度でも生きています。モナークチョウというレイチェル・カーソンが好きだったチョウは3500キロ飛ぶんです。人間は35キロを歩くだけでも大変ですよ。だから、あれが人間の大きさになれば、地球を楽に一周できるんです。

そういうふうには、私たちが知らない価値観が相当いっぱいあったということで、対象として観察していくうちに、ずっと中へ入って行って、向こうから見直してみたら、全然違うものが見えてきたというのが、現代科学です。デカルトによると、あくまでもこっち側にいたわけです。アインシュタインの相対論をすごく難しく考えている人がいるけれど、「物事は相対的でなくて、相手からも見直してみる」ということですね。

デカルトもニュートンも、なんのことはない、一神教のキリスト教徒で、ある絶対の神がいて、そのもとの永遠に人類は発展できると思いついていた人です。でも、地球は完全に有限だし、宇宙だって有限ですね。地球が危ないという人がいるけれど、地球なんて全然危なくない。人間が減ってしまったら、ほかの生物がゆっくり生きられるだけの話です。そういうことをもう一回よく考え直してみることです。実のところ、ソローはそこまで言っているんですよ。そこが普通の科学者と違うところです。

私が大学を辞めたのも、はっきりいえば、大学の先生の8~9割はわかっていないからです。分析的にやってきた科学がどこまでできたかということです。近代合理主義による非常な分裂主義で、それでいて市場拡大主義になって行って、環境問題を起こしている。これは哲学的なレベルで、もはや問題なんですよ。これをソローはわかっていたし、漱石もわかっていたんです。それなのに次の科学者たちがわからない。私も科学をやっていたんですが、多少ありましたから、27歳のときに悟ったんです。私は原子物理学者で、バカでもなかったんですよ。世が世なら、ずっとあそこにいれば……。でも、辞めてよかった。なぜかというと、原子力をやっている私の友達に四苦

八苦ししていますよ。

青木：従来の観察の仕方、分析の仕方、ものの捉え方が、今、ものすごい限界にきているように聞こえてきますけれど。

稲本：きていますね。相対論がわかっていないからです。ニュートン力学はすごく狭い世界でしか正しくないということがわかっていない。デカルトもある範囲内では正しいけれど、地球とか宇宙とか、今の社会現象を全部見ると、正しくない。進化論も、強いやつだけが勝ち抜くというのがある解釈ですが、強いやつだけが勝ち抜いたら、種は多様にならないはずですよ。ところが、生物は圧倒的に多様になっていっている。ということは、「共生進化」といって、こっちも勝ち、こっちも勝ちなんです。だから、トヨタもあまり勝つてはいけないんですよ。偉いのは、日産にハイブリッドを提供したことです。

青木：三菱自動車をサポートしたりとか。

稲本：これは共生進化ですよ。生物社会もみんなそれでやっているわけです。「競争進化から共生進化へ」という観察までいけるかどうかの問題だという気がしているんです。

青木：「観察」というキーワードで、ずっと聞いてきていますが、澤田さん、今のこの時代をどういうふうに見ているんですか。

澤田：私はあまり思想を語る人間ではなく、思想を人にどうわかりやすく伝えるかということを一生涯懸命工夫する側ですから、この人たちは何に反応しているんだろうか、ということを見ているわけです。今、大衆はこういうものに反応している、この人はこういうふうに対応する、こっちにちょっとフェイントをかけて、こうやると反応しやすい、ということをやったりしています。

環境の話では、『ソトコト』という雑誌があって、最近、駅の売店に置かれるようになりました。ということは、一般の娯楽として、スタイルがカッコいい、それにお金を払おう、という一般の雑誌に近い感覚が出てきたわけです。この会場が若い人でいっぱいになっている現象も、それに近いのではないかと見ています。

青木：ソローは150年前のアメリカの社会を観察したわけですが、日本の今の社会をどういうふうに見ていますか。今泉さんは、暮らしにくいな、と思っただけじゃないですか。

今泉：それはもう大変な社会ですね。私は1940年生まれで、戦後しばらくは日本は世界の最貧国でしたから、こういうふうにな

るとは全然予測しておりませんでした。小学校のときに習ったのは、もっと牧歌的な平和な国になるという話でした。ですから、私は異様な感じを持っています。

一方で、最近インターネットがあるし、航空運賃が安くなって、日本から外国に自由に行けるようになりました。都留市の大学に着任した20年前は、とても文献が少なく、ソローを読むことは夢のまた夢で、自然科学の研究でも文献にはとても困った時代でした。それが、ここ何年かで、あっという間に開けて、日本にいても外国の本は自由に買えるようになりました。ついこの間までは、洋書を買うにしても紀伊国屋さんに注文すると、3カ月ぐらい経って、ありません、と言ってくるわけです。日本の読書環境は非常に悪かったのです。今は自在に手に入ります。

そういうふうにグローバリゼーションはものすごいんですね。そういう意味では、グローバリゼーションの全体としての非常に悲惨なことと併せて、先進国はものすごい利益を得ているという一端がそういうことだと思います。世界中から情報を得られるので、読書環境は抜群によくなって、私が想像しなかったような仕事ができるようになりました。ソローを訳すことはそのひとつですが、仕事がひとつ増えたということです。世界の経済は猛烈な混ざり合いの時代で、いまだかつてない時代に突入していると思います。



青木：稲本さん、いかがでしょう。

稲本：今の時代はダメだと大変だと言っても問題はなにも解決しないわけで、ダメなのはわかりきっているのですけれど、私は「なぜ日本人はここまで自信を喪失したか」ということが不思議なんです。環境から見ると、江戸時代までは世界で最も環境のよい国だったわけですし、明治に入っても、自然に対して「草木一本でも大切にしましょう」という思想はものすごく持っていたわけですよ。それから、工業製品があれだけになったのも、木工とか漆とか陶器の技術をものすごく持っていたからだと思います。

グローバリズムだけれども、欧米人と同じ主体性を持つようとしているところに間違

いがあると思うんです。彼らは戦いばかりしていた人たちで、日本は島国で、戦ってこなかったんですよ。ドイツ人と話すと、論理的にガンガン攻めてくるけれど、日本では「理屈ではわかりますけれどね」と言ったら、断りの文句なんです。「理屈ではわかりますけれど、私はしない」と言ってもいいわけです。欧米人と話して「理屈ではわかりますけれどね」と言って、「しない」と言ったら、あなたはバカカウソつきだと言われる。

私は、「腑に落ちなければやらない」というのもひとつの主体性だと思う。自然との関係で言うと「じねん」という考え方を持っていたからです。日本人は「自然のなかに自分がいる」と思っている。欧米人に「あなたは自然の一部ですか」と聞かれた場合、日本人の多くは「私も自然の一部です」と言うんですよ。そうすると、「あなたはサルか。人間だろう。人間は自然の一部じゃない」と言われるのは決まりきっているんです。デカルトたちが決めたんだから。ネイティヴアメリカンなどでもないかぎり、人間は自然の一部ではない。だから人間なんですよ。

そのへんの主体性のあり方が違うということを確認に意識すべきだと思う。日本の民主主義は欧米の民主主義と同じであるべきではないんです。根回しをしながら話してもいい。共生進化は、たぶん日本人がすぐうまくて、21世紀から22世紀にかけて環境問題を考えていくときに、日本はイニシアチブをとれると思うんです。主体を考えると、自分だけのことを考えないで、相手を慮る。「もったいない」「慮る」という発想はすごく大切です。これは共生進化しようというもので、それがない欧米人に対して、「あなたたちは足りないんだ」と言ってあげればいい。ところが、日本人は「自分が悪かった」とすぐ謝ってしまう。そこをひっくり返して自信を持つことです。ただ、日本人が自信を持つためには、日本の文化なり歴史なりをしっかりと勉強したほうが良いと思う。

青木：澤田さんも、そもそも日本という国は文明が違う、ということもおっしゃってましたね。

澤田：「森の文明」という話をよくするのですけれど、小麦をつくっていた文化と稲作をしていた文化は決定的に違って、稲作は労働集約性が高くないと、なかなかうまくいかない。ところが、小麦は蒔けばできる。私はつくったことがないからよくはわからないのですが、土地がどのくらいあるかということが重要な問題で、森は邪魔なわけです。そこを攻めとって、みんな奴隷

にしてバーッと蒔かせれば、どんどん収量が増える。そういうふうにとんども外に向かっていく世界で、人は森林をどんどん食いつぶしていった。それに対して、日本は農業でやっていくわけですから、「理屈はわかるけどもなあ」と言いつつ、共同体を維持していく。この二つの違いがあって、たまたまヤギがいたり、いなかったりというなかで、森の文化を維持してきた。世界の中で森の文化を維持しているのは、先進工業国では日本だけで、中国もほとんど違うといわれています。

そのなかでいちばん違う感覚は、「ユートピア」と「桃源郷」という言葉にあります。欧米人にとって、ユートピアは外の世界にあって、自分の世界にない。だから、とんども外に行くことによってユートピアを実現するというところで、それが宇宙開発につながってくるし、とんども外に出ていくことになる。ところが、日本人にとっての桃源郷は、住んでいる村の中にあたり、自分の内側にあるということだと思います。

観察についても、外を観察するのではなくて、自分の村を見て、その中に何かがあるのかを見て、それを再評価していくわけです。それを自分の中の価値観に置き換えてそれで満足する。そのなかに自分の理想郷を求めていこうとします。

地球の「つきあたり」がないと思っている人はいないと思いますが、今まで小麦をつくっている人は、あるということ前提には考えていなかったわけです。ところが、日本人は中に理想郷をつくることをずっと考えてきましたから、そういう人たちが、今、「つきあたり」のなかで何を発信しようとするのかということは大事な話だし、世界は待っていると思います。

しかし、そこでちょっと矛盾があるのは、日本人は議論下手だから「皆さんがおっしゃるのはそうだけれど、私はそうは思わないだけれど」となって言い返さないけれども、言い返すようになると国民性が変わって、アメリカ人と同じになっちゃうということです。そのへんがやや難しいところですよ。

話はズレますが、広告の世界でグループミーティングをよくやります。マジックミラーの後ろに人がいて、「この製品をどう思いますか」と、男性と女性を分けて聞きますと、男性と女性でいちばん違うのは、男性は製品を出している側を慮って「なかなか良い製品ですね」とまず誉めて、おもむろに「でも、ここが四角いのは、私はあまり好きじゃない。非常にいいんだけど、私はこれがちょっと……」と言う。女

性は、いきなり「あたし、きれい、これは」と言う。まず自分がどう思うかというスタートなんです。どっちがいいのかという問題はあるのですが、主張ははっきりしている。稲本さんが、女性は頼りがいがあるけれど男性は、と言うのは、そこにあると思うんです。

日本のジレンマはそういうところがすごくあって、あるところは日本の男性のように、「まあまあ、そうだよな。うちの課長もちょっとアホやけど、しょうがないな」という世界と、「いやなものはいや。きれいなものはきれい」と言いきってしまう女性の世界とあって、重要なところで、どちらにいくんだろうと葛藤しているような感じがしますね。

青木：観察ということで聞いてきました。日本が共生した時代、木工が盛んで、手に力もあった時代から、戦後、だんだん変化して、貧しい時代から豊かな時代になってくるなかで、グローバリズムがものすごく進んでいると感じることもあれば、そのなかで環境についてやっていこうという意欲も見えてきている。ただ、日本人はちょっと自信がないのか、と思えるようなところが出てきています。もっと自信をもって日本の文明とか歴史をしっかり観察して、社会に発信していくことが大事なのではないか。そういうふうに関心とれました。

今泉：「日本特殊論」みたいになってきていますけれども、ソローの言葉でいえば「物と出来事が世界の標準語」で、ヨーロッパの人でもアジアの人でもどこの人でも、自然が好きなのはお互いに通じる場所があるという意味だと思うのです。直接観察して、そこから受ける印象は、人間であるかぎり共感できるものだとすることで通じるのだと思うのです。

ソローも、ヨーロッパの思想だけではなく、中国とかインド、アジアの思想に非常に関心を持って、むしろ日本人よりずっとそういう思想に通じていました。そのときのもと「自然観察からくる普遍的な目」ではないかと私は理解しています。

青木：自然をゆっくりじっくり観察して、歴史をひもといていけば、どの民族、どの国の人であっても、同じような共通の価値観にたどりつけるかもしれない。

今泉：それが「物と出来事が世界の標準語」という意味で、標準語とは世界に通用するという意味だと思います。

稲本：補足ですが。アングロサクソンの人たちとスタンスは違うのですが、まったく通じないかという、今、言われたように、ソローは西の文化から東の文化に架け橋を架けようとした続けた人なんです。

それで、私は漱石と比較したんです。漱石は江戸っ子で、日本人独特の感性を持ってロンドンに留学して、パリ万博を見て、いたく感動するんです。でも、やっぱりちょっと違うなと思った。だから、彼はひたすら東洋から西洋へ橋を架けようとしたんです。本当は出会ってればよかったのだけれど、ソローのほうが先に死んで、漱石はあとだったんですけれどね。

私はアメリカの環境団体ともよく話すのですが、アメリカの団体の優秀な人はほとんど東洋思想です。「ディープ・エコロジー」はみんなそうなりつつある。だいたい日本食を食べるのがステータスで、「日本食、食べてないの？」と言う。週に3日食べるのが環境派なんです。それから、日本のものをいっぱい持っています。彼らは、漆がジャパンだと知っているから、ジャパニーズは漆を持っているものだと思います。ところが、日本の人は持っていない。だから、変なことが出てきてね。ヨーロッパとかアメリカの環境派で親日派は、日本の禅をよく勉強していますが、なぜか日本人は自分たちのことを勉強しない。だから、ソローを勉強して、もう一回、日本に戻ってほしいと思う。そういう意味で、今泉さんが言われたように、人種を超えてつなぐようなものは徐々にできている。これは環境がつかないと思います。

澤田：万博で来るアーティストは、お箸を使うのがうまいですよ。日本の若い人は変な使い方をしている。

稲本：日本の若い子より親日家のほうが圧倒的にうまい。ほくよりうまい人がいっぱいいるもの。

澤田：気を使って、お刺し身を食べさせたら、その店がイタリア料理風にアレンジしてオイルをかけたんです。そしたら、イタリア人が怒りまして、「おれは刺し身に醤油をかけて食いたい！」と日本人をしっかりとつけていました。

稲本：アメリカの環境局の局長あたりは盆栽を持っていますよ。

青木：内なる自然の桃源郷みたいな意味合いなんですかね。

澤田：「つきあたり」にきているというこ



とを実感しますね。日本人は何を考えたのか、日本の文化のなかに何かを見つけた、という思いがものすごく強い。

さっき、ロバート・ウイルソンの話をしましたけれども、日本庭園でローリー・アンダーソンがコラボレーションをするんですが、彼女は「私はブディストです」と仏典を持ってきて、それを日本人は全部知っていると思って話をするわけです。それをベースに、私は日本庭園をこう考えましたという話をする。まさに彼女ら、彼らは日本にそれを探しにきているという感じがします。

「実践」について

青木：観察から実践に移っていきたくて思いますが、質問がたくさんきています。「森の生活を都会でもするヒントはありますか」という質問をいただいています。盆栽はその一つのスタイルかもしれませんが、その他に質問がきていると思いますので、今泉さん、稲本さん、お願いします。今泉：「稲本さんは木工等で経済活動を支えているけれども、今泉さんは野生生物系でどうするんですか」という質問があります。この答えは二つありまして、一つはソローのように生きればいわけです。野生生物系は意外にお金になりまして、私自身がお金を稼いでいるわけではないのですが、畑をつくるより野生生物の写真を撮るほうが、たぶんお金になります。たとえば、サルの写真を1枚撮れば3万円で売れたりしますけれども、畑をつくってはいけません。これは単純に今の日本の経済状況について言っています、そういう不思議な経済状況です。

しかし、根本的な仕事として、野生生物を観察してどうするんだということについては、ソローは1849年頃、ウォールデン池の暮らしを終えて、「森の生活」を実際に書いているときに、「もの書きとして生きること」に決めた」と言っています。それは、森の生活を都会に住んでいる人たちに伝えるという仕事です。

そのことは動物物語作家のシートンも言っています。開拓者として入った土地は畑にしていかなければなりません、そのままにしておいて、そこで見た野生生物と仲良く暮らしている先住民の暮らしを伝える。アメリカですから、西部を東部に伝えて生きていく。まさに環境教育とはそういう暮らしです。それは必要だと思います。稲本：おもしろい質問があります。「みんなが森の生活を始めたら、森はみんな壊れて、なくなってしまうのではないか」というのですが、壊れないんですね。里山がわ

かっていないんだと思うんですけど、日本人のやり方は何が違うかという、「森を豊かにしながら生活する術」をつくったのは日本人で、これが里山なんです。アマゾンには里山はないんです。原生林か土地しかない。アメリカもほとんどそうです。

ソローも「原生の森」と言っていて、コンコードが里山かどうか、ちょっとあぶない。当時、農業をやすぎてコンコードまで相当壊れていたんですよ。ソローは若干問題だと常に思っていたんですけど、あの時代、近代合理主義はそうですが、自然をなにしろ克服していこうとしたんです。ところが、日本人は三内丸山の時代、縄文の時代から、自然と一緒にやっっていこうということで、ウルシの木もクリの木も植えていたんです。クリの木を植えて、クリを食べながら1000年生きたんです。1000年ですごいですよ。

オークヴィレッジに来てもらえばいいので、この質問をした人はぜひ来てください。別荘分譲に失敗した、まったくの荒地に木を植えて生きているわけです。そして、家具をつくったらその分、植えるということをやっています。だから、持続可能かどうかということが問題なんです。今泉：私も「日本人すべてが森で生活したら、環境はどうなるのでしょうか」という質問を受けていますが、これは困るという意味でしょうか。それは全然心配は要りません。稲本さんが言われるのは逆の意味で、まず、だれも入りませぬ。30年ぐらいは大丈夫です。

トヨタさんには悪いけれども、車を買わずに、あるいは、今の車で10年我慢して、次の車を買うおカネで森を買われたらいいと思います。私は車をやめまして、何台分かの土地を買って、どんどん増やしていますけれど、車1台分で自分の理想の森を買えます。それはユートピアです。キリスト教とか信仰の世界では、ユートピアは死んでから行きますが、ソローの世界では、それはすぐ隣にある。すばらしい自然をユートピアとしてとらえているわけです。

今の日本ではそれが買えます。私が子どものときは、買うのは不可能だと思いました。当時、日本の農業は健全で、農地を手放す人なんかいるはずがないと思っていました。ですから、手に入れるのは私の生涯の仕事でしたが、最近では農業は破産続きですね。私は、岩手である破産農家の土地をそのまま買いましたが、それは裁判所の差押え物件です。そういうものは山のようにありますけれど、応札する人はだれもいません。そのときも私以外にはだれもいなくて、ぜひやってくれと農協から頼まれました。

た。もちろん頼まれなくても私は喜んで買いますけれど、そういう状況なんです。

青木：そのぐらいで買える範囲のものなんですね。車だったら、みんな、一生のなかで何度も買うと思いますが。

今泉：たしかに車は美しくてよいけれども、別の意味で森も非常に美しい。

アレックス・カーという美術評論家が何十年か前に日本に来て、祖谷(いや)の山奥の森と一緒に日本家屋を買って、生涯の仕事として、それを美しく変えていくということを学生のときに決断したんです。すごいなと思った。私がお話を学生のときに知っていたら、森を買ったと思います。私は、「森を買おうだよ」と学生に毎回言っていますけれど、実行したのは二人です。

青木：二人もいればすごいですね。

今泉：二人いれば、すごいかもしれませんね。



稲本：具体的にいうと、坪2000円です。今はちょっと高くなりましたけれど。だから、車を買いつつ土地を買うことができるんですよ。

「都会に住んではいけないですか」という質問がありますが、それはいいと思っています。私はしょっちゅう都会に出てきています。みんなが森に住まなければいけないということはないんですよ。住もうと思えば住めるし、住みたい人は住めばいい。問題は、6%のCO2の削減に8%足されたから14%削減しなければいけないということで、とりあえずは、そのためにはどうすればいいかを考えればいいんです。

青木：都会に住んでいてもいいから。

稲本：そう。14%削減するためには、どうすればいいか。どんどん電気を使っているけれど、もう少し減らすとか、環境に良い車やモノを使う。それから、最低、自分が吸うのに必要な16本の樹木を植える。できれば300本植えましょう。300本以上植えれば、いくら酸素を吸ってもいいんです。CO2をいくら出してもいいということではないけれども、ツーベイしているわけです。だから、都会に住みながらもたまたま植林に行くとか、皆さんに環境教育をしてあげるとか、そういう生活をすればいいんです。簡単なことでは、ドングリを一粒でい

いから植える。それから、この水の向こうには森がある、この水が飲めるのは森があるからだということを理解すれば、都会で生活していいと思うんです。

青木：いつかは森の生活をしてみたいと思っている方は、どれぐらいいますか。けっこう多いですね。都会に住んでもいい、と言われつつも、たくさんいます。そこで、こういう質問もきています。「私は都会に住んでいますけれど、いつかは職業として自然の再生をしたり、森の中に入ったい」という気持ちがあります。でも、なんとなく田舎に行きにくいとか、自然に入っていくのが怖い。今の生活が捨てられないのではないかという恐れのかなで、なかなか出ていけない。

稲本さんは、28歳のときに東京から飛騨に移り住み、今泉さんも阿佐ヶ谷出身で、そこから田舎に行く瞬間があったと思うのですが、そのときは怖くはなかったですか。

稲本：行けるかどうか実験をする。何だってそうですよ。ちょっとやってみて、行けると思えばやるわけです。若い人でも、歳をとってからでも可能で、トライアルしてみればいいですよ。車で燃料電池というのはトライアルです。常にトライアルすることが大切です。

私は大学で物理の先生をしていて、これはダメだと思って、まず旅行したんです。旅行をしているうちに、長野県的美麻村に小屋を建てたいなと思って、大学に勤めながら休みごとに行って、小屋を建てていたわけです。そしたら、大工が「おまえ、筋がいいからプロになれるよ」と言ったんです。そこまでは訓練と実験をし続けて、自分で自信を高めていくしかしょうがない。

ソローもハーヴァード大学を出てから、学校の先生を3日ぐらやって、いやになって、すぐ辞めてしまうんです。それで、やっぱり彼はウォールデンに行ったりして、いろいろトライアルしているんですね。だから、だれでも訓練して、トライアルして、あるところまでいけそうだなと思えば、実行すればいい。

それから、特殊技術を持っていないければ絶対ダメだと思うんです。今泉さんは、持っていないさそうな顔をしているけれど、特殊技術をすごい持っているんですよ。ちゃんと訳せるし、動物学をやっている。私も木工の腕はこれでもいいんです。何か持っていないければいい。

武者小路実篤の「新しい村」はダメだなと思ったのは、よく調べてみると、みんな、武者小路さんにぶら下がろうと思って、そういうやつはダメなの。漆

を塗ることでもいいし、図面を書けるのもいいし、自分の技術があることです。田舎でもインターネットで高速に何かができる。うちにもいるけれど、CGのできるデザイナーはすごい重要なんです。どんな田舎にいたって、すぐニューヨークに送れるわけです。特殊技術を持つことが重要だと思います。

今泉：まったくそのとおりだと思いますけれども、多くの人はもうちょっと単純なことで、夜の森を歩くのが怖いとか、そういうことだと思います。よく学生から聞くのですけれど、森を歩いていると後ろから何かがつけてくるような気がするとか、最初は怖いらしいんです。私は初めのころを忘れてしまうんですけど、私は杉並に育って、中学のころは高尾山によく行きました。夜、一人で歩いていると、その頃は高尾山でもけっこう怖くて、そういう感じを持ちましたけれど、動物は、その怖いはずの森を歩いていますね。ノズミは元気にやっていますし、ムササビは自在に飛んでいますし、動物は怖がっていない。そう思うと、ずっと怖くなくなります。それでも、夜のお墓を歩くのは、けっこう怖いと思います。

青木：それは怖いですね。

今泉：私はムササビの観察で真夜中にそういうところへ出かけますけれど、もともと持っている人間の正直な気持ちで、やっぱり怖いんですね。でも、都会もとても怖いと思いますね。自動車のことばかり言いますが、いちばん怖いのは自動車です。どこから飛んでくるかわからない。クマはそばを通っても全然怖くありませんが、自動車はバンクしたら、こっちへ来るわけです。特に国道を歩いていると怖いんですね。そういうことをリアルに考えていくと、自然は決して怖くないし、怖いと感じる自分も愛しい。

しかし、森を買って、都会で暮らしている者がそこで堂々と生きられるかという、地元の方にはしょっちゅう笑われるようなことばかりです。つきあって10年経って、自分は森とこういうふうにつきあえる、この木についてもこうできる、ということがわかってくる。だから、10年、20年



とかかるわけで、そういう意味で、環境教育はそんなに簡単ではないと思っています。そういうことをバツと伝えたからといってわかることではないので、すべての人が森を経験しなければ森についてわからないのだとしたら、大変な事業ですよね。それはつくづく思います。

青木：自分の技術を持とう、トライアルしてみよう、というアドバイスがありました。[「若者がそういう方向に行くためには、バックアップしてくれる大人たちの役割も大事だと思います」とか「森に行きやすい社会の制度や経済の仕組みがあるといい」というご意見もいただいています。それについては、どう思われますか。

稲本：そんなことは必要はないですよ。自分でやればいいだけのことだと思います。アルバイトして、ちょっとお金を貯めれば田舎ではそんなにお金は要らないんですよ。だから、本気になってやればいいと思うんです。たぶん自信がない。それと、大人たちが「やっちゃいけない」というプレッシャーをかけていることがよくない。それがいちばん怖いと思う。

青木：都会を離れて、年取が下がってはダメとか。

稲本：そうそう。今泉さんが言われたことを忘れていたんだけど、私も最初は夜の森を歩くのは怖かったんです。ところが、田舎の森をある程度歩いてから都会へ来たら、都会ほど怖いものはないと思ってね。だから、慣れなんだよね。

もうひとつ困ったのは、うちの若い子も私もさいなまれるのは、田舎へ行ってやるのがメインから離れているんじゃないか、社会から取り残されるんじゃないか、という思いです。ただ、皆さんが持たなければいけないのは、時代の変換期には主流にいただけではダメだという考えです。

たとえば、陸上に上がったアカンサステガという両生類は、サカナの落ちこぼれだったんです。マグロは百何キロで泳ぎますけれど、それに対して、うまく泳げなかったやつが川の端の浅いところにおいて、そのうち水がなくなって、川で生きられなくなって陸に上がったんです。逃げに逃げて、結局、陸上に上がって、陸上で新しい世界をつくった。進化の歴史を見ると、けっこうそういうものが多い。

だから、変化の時代にあっては、森へ行ったり新しいことをする人を、日本全体としてバックアップする必要はないわけで、「そういう人がいてもいい」とみんなが思うことです。そういう人が新しい時代を築くかもしれない。

トヨタさんがエコのもりセミナーとかト

ヨタ白川郷自然学校をバックアップしているのは、したたかなんだな。自動車の本流にいるんだけど、ヤバイかもしれないと思っている人がいるんですよ。だれも行かないような山の中でやっていたら、ひょっとしたら良いことがあるかもしれないと、私たちは放し飼いにされているんだけど、本当にひょっとしたら、そうなんです。日本はそういうことを認める社会ではないことが問題で、世界的にはけっこう認めているんですよ。

青木：そんな人もいるよ、ということ認めない。家族とか親戚に、そういう人がいると、ひどい言われようですからね。

稲本：それを認める。さっきの、マジョリティになれるかどうかという話も、そう簡単にはマジョリティになれないけれど、マイノリティというか、イノベーターというか、新しい人が出てきたらそこに閉じ込めておこうという発想が危険だと思う。

青木：実践していこうということで、こういう質問もきています。「私は、週末は里山保全活動をやっています。できるだけ森にも出かけて、森の木を使う市民活動をやっている人間です。でも、それだけやっても、持続可能な社会にならないのではないかと不安に思っています。どうやったら、都会で暮らす普通の人、一人ひとりの市民の心のありように変化を与えることができるのでしょうか」。同様に「価値観の変換の必要性とか、パラダイムシフトが大事だとか、考え方をええようとか、ものの観察の仕方を変えようとか、そういうことはわかるけれども、マンションの隣に住むニイチャン、ネエチャン、オジサン、オバサンにどう伝えていけばいいのか」という質問が多数寄せられています。

澤田：私は環境の専門家じゃないので、本質とは違うのかもしれませんが。さっき、「ソトコト」がだんだん売れるようになったという話をしましたけれど、要するに、カッコいいと思われればいい。お金が儲かったり、システムに乗るようになればいいと思うんです。「みんなで修験者のように我慢して、良いことをしましょう」と言ってもダイエットにすぐ負けてしまうように、我慢できないんだと思うんです。人間の本能は生命を維持するために自然から与えられたもので、それに負けてしまうんですね。そうすると、それを刺激しつつ、なおかつ環境を改良するようなかたちにビジネスのパラダイムシフトをしないとダメなんじゃないか。カッコいいものを得ると、豊かな気分になるから、モノが買いたくなって、トヨタ自動車を買ってしまうけれども、そういう循環がしっかりできるように

なればいいんじゃないかと思うんです。具体的に何か、といわれると、なかなか難しいのですが、環境を守ろう、CO2を出すのをやめようと言っても、かなり限界があるだろうと思います。それよりも、言い方はおかしいけれども、人間の本能とか射倂心を刺激することが環境を守ることに直結するように考えればいいのではないかと思います。トヨタも、いつまでも車をつくっていないんじゃないか。ビッグビジネスになっていたかといいたくないんじゃないかと思っています。

稲本：成功例が出てくると変わるんですよ。オスカーをもらう人たちは、アメリカのデカイ車に乗っていくのはカッコ悪くて、プリウスに乗ってきているんですよ。これは時代の変換です。

うちは経済活動をちゃんとしながら、日本、アマゾン、マダガスカルで木を植えて、万博にも協力していますけれど、うちは出しているCO2をほとんど吸収するだけの森をつくっているんです。カーボンバランスをちゃんととっている企業はカッコいい。今やそこまでできているんですよ。

メジャーになるのは難しいという話ですけど、日本人の意識はどんどん上がってきていて、カーボンバラスとかLCA（Life Cycle Assessment）にもすごく敏感になっている。あそこが出しているものは、本当に環境にいいのか悪いのかということをチェックするようになってきていますから、これは目の前にきていると思います。環境に良いことをしている会社しか生き延びることができなくなりつつある時代なんですよ。経済活動と環境が完全にドッキングしつつあるなかで、よりシビアになってきているわけです。トヨタさんもハイブリッドに頼らないで、次はハイブリッドと燃料電池を結びつけなければいけない。これもけっこう真剣に考えていると思います。そういう時代になってきているので、もうすぐいけるんじゃないかという感じが若干しています。

今泉：そういうことはみんな大事だと思いますけれども、ある一部の人にはまた別の危機感を持って、いろいろな危機感を持ってやる方がいいと思うんです。日本は、少なくとも戦争前まで、今のお年寄りが若かった頃は、すべて有機農業でやっていました。その手応えはお年寄りが知っているわけです。それから、農家は「食物工場」で、味噌から何からみんなつくっていたわけです。それをそのまま再現することはありませんけれども、その感触とか、そこからくるいろいろな考え方は、お年寄りの中にあります。先ほど、どういうことをした

らいいか、若者がそういうことをしたら支援するといった話がありました。日本中でそういうことをやらなければ、あと数年経ったらほとんどできなくなりますね。

私が住んでいる都留市では、冬に湧き水を田んぼに引いて、その中で葉っ葉をつくる水かけ菜という栽培方法があるんですけども、その担い手はほとんど75歳を超えています。そこに落ち葉を運んでいけば堆肥になって、さらに良いかたちでできるのに、若者はたくさんいてもだれもそんなことをする人はいません。

そういうことが日本中で起こっていますから、いろいろカッコいいこともありますけれど、そういうことに気がついたら、やることしかない。そうしないと、そういうものをよみがえらせたり、後世に伝えていく精神は途絶える。世代の交代という意味で、非常に危機的な状況にあるのではないのでしょうか。

稲本：それも言われるとおりで、うちは「森林たくみ塾」で有機の農業を30年やっているんです。私はうちへ来た若い子に「日本人のくせに自分の米ぐらい自分でつくらなくてはダメだ」と言っているんです。米をつくるとおもしろいんだよ。コシヒカリがどうのこうのより、自分でつくった米はやっぱりおいしい。それから、籾殻で保存したほうがおいしい。食べる前に籾殻をとって、何分搗きにするかは自分の好みでやる。

そういうことは、まだまだできるんです。いっぱい田んぼが余っているんですよ。環境教育は、感性で気づかせるということはもちろんあるけれど、「実践」がテーマだと思うのでトヨタ白川郷自然学校でもやろうと思っているんですが、現実には農業をやったり、間伐材で家具をつくったりする。ソーロもそれをやろうとしたわけですが、この時代にもできる可能性があるんです。これこそ環境教育です。環境教育が机の上の観念になってしまっているの、生活の中でやらなければダメだという気がしています。

澤田：豊かさとは何だろうかというときに、東京では何でも手に入る気がするけれども、東京の人がいちばん貧しい生活を



しているんだろうと思うんです。

私は2001年に山口で博覧会のお手伝いをして、3年間ぐらい通い続けて、山の多い生活と東京の生活の間で行ったり来たりしていたんです。東京に3日ぐらいいると飽きて、山口に行くとも山がいっぱいあっていいと思うけれど山も飽きて、飽きた頃に東京に戻る。非常にいい生活を3年間していたのですが、そのときにすごく感じたのは、山口は食材が豊かで、安くて、人情味があって、いろいろな話をしながら、おいしいものが食べられる。心にも体にも非常に良い生活ができるということです。東京へ帰ってくると、全くそういう生活ができない。日曜日に遊びにいこうと思うと、すごい渋滞の中を我慢していかなければいけないけれども、山口の人はそんなことはない。どちらが人間として豊かで良いのだろうかと考えると、やっぱり山口のほうが良いのではないかというように、ひとつのスケールにのせて測っていく必要があるんじゃないかという気がします。

本当に心の豊かなことはなんだろうか。ビールを飲む前に汗をかいたらおいしいけれども、そのために車に乗って、ウェイトトレーニングに行き、お金と電気を使っているのはいけない。知らず知らずに持っているものを手から放してみる。引き算をすることが重要な気がしています。私が着ているのももそうで、持っていて当たり前だと思っていますが、意外となくても済むものがあるような気がしています。それを手から一つひとつ外してみる。そういうなかにもおもしろいものがあるんじゃないかという気がします。

青木：実践をしていくうえで、何かを手放していくと同時に、何かを自分の手に取り戻していくような感覚がありますね。一見、便利そうなものを一回手放して、もう一回、自分の手でつくったり、かかわったりする。ほかの人と一緒に、食べ物や住む場所や家具などをつくり直していく作業を実践していく必要があるんだろうと、聞いていて感じました。

「観察と実践」というテーマでお話ししてきました。まだ答えきれていない質問はありますか。

稲本：いちばん多いのは「どこから始めたらいいか」という質問です。どこからでも始められるので、精神性を高めることから始めやすい人はそうすればいいと思います。

東京に住んでいても、うちは三鷹のICUに苗畑を持っていて、百数十坪で1万本ぐらいの苗が育つんです。多いときは2週間に1回は集まって、苗を育て、育ったやつを山へ持って行って植える。みんな、ボラ

ンティアでやっているんです。苗ばかりじゃいやだと、子どもたちがときどきジャガイモやサツマイモを植えています。農業、林業を、半分遊びながら楽しくできるんですよ。

ここに集まれた人も、インターネットなどで探せば、情報はいっぱいあるので、始めたいことが何か見つかると思います。あまり考えないで、今泉さんの訳した本は珍しくわかりやすい『森の生活』ですから、本を読むのもいいし、それでもわからなかったら、私の『ソローと漱石の森』を読んでいただければ絶対わかるように書いてあります。小さいテーマから見つけていくとどんどん階段を上がるように行けると思います。

全員が変わらなければいけないと思っている人がいるんですけど、変わる必要はないんですよ。トヨタ自動車でも、本当に働いている人は2~3割です。オークヴィレッジでもそうです。本気で命を賭けて会社のためにやろうなんていうやつは2割ぐらいしかない。でも、1~2割がそうだと社会は変わる。ドイツの緑の党だって、大してないけれど、やる気になっているやつがちゃんといる。生物もそうで、ミツバチも方針を決めるのは1~2割で、どの集団でも5割は付和雷同派です。皆さんがリーダーシップをとろうと思ったら、1~2割になるということで、なりたいた人はどんどんやればいいし、無理はしないという人は、ちょっと良い側の付和雷同派になるということで、これから時代はいやでも変わっていくんじゃないかという気がします。

ただ、世の中の方向性があるんです。最初の一步はほんのちょっぴりで、それがダダッと悪くいく。また、良い方向に一步いくと良くなるんです。私はオークヴィレッジを30年もやっていて、それがわかるんです。40~50人のグループがちょっと良い方向にいくと、みんなが良くなる。一時、農業なんかやめよう、自分が生きている間に使えない木を植えるのはやめようという雰囲気があって、だれも植えなかった時期があったんです。ところが、またあるとき植えようと言い始めて植えて、だんだん大きくなったら、みんな喜んで植えるようになった。だから、「最初にどこに向かうか」ということが、特に今、重要なときで、万博も含めて、環境のほうにちょっとシフトし始めると、いけるんじゃないかなという気がしています。

青木：本気になる1~2割になろうということですね。ソローも、自分が正しいと思う生き方、自分が信じる生き方をやっていく、と言っていますが、それに本気でぶつ

かっていく。あの人がやっていない、この人がやっていない、と言わないで、自分がやっていくことがすごく大事なんだろうと思います。

最後に今泉さん、澤田さんからも一言ずついただきます。

今泉：最後に、ソローが私たちに示している三つのヒントをお話したいと思います。一つは「自分を鍛え、自分の感覚を楽しませる」ということです。経験に基づいた裏付けのある知識で自分をしっかりさせていく。経験は楽しいからするわけですから、感覚を楽しませるということ、これは「快樂主義者」とも訳されていますけれども、経験を楽しむということだと思います。

もう一つ、ソローは森の家に「三つの椅子」を用意していましたが、それは社会に対するスタンスです。一つは自分のための椅子、もう一つは友達、友情のための椅子、もう一つは社会、みんなのための椅子、と言っています。本当に三つ用意していたんです。

あともう一つは、その他たくさんということで、どの文章も非常にすばらしい言葉で満ちているので、どれもヒントになるのではないかと思います。

澤田：ある企業の開発をやっている知人が、こういうことを言っています。若い人がこの実験をやりたい、こういう研究をやりたいと言ったときに、それは前にやって失敗したからやめろと言う主任研究員がいちばん悪い。失敗したら、その人はその中から何かを学ぶ。その学んだことが重要で、失敗させない研究者はどんどんダメになっていく。そういうことだと思います。

どこから始めればいいのか、ということより、「どこからでもいいから実践してみること」が重要なんだろうと思います。私たちも含め、教えられることに慣れてしまって、なんでもかんでもセットされて、教科書的に教えられて、これが成功する法則だと言われてしまうから失敗が怖くてできないということがあると思うんです。なんでも実践してみる事が大事だと思います。そして、そこからフィードバックして自分としての意見を持つことが大事で、それぞれが意見をしっかり持って、みんなが違う意見であることをちゃんと認めあって、ひとつの社会ができるということが大事だと思います。

実体験をしてみるという意味で、私の専門のイベントは非常に役に立っています。クリスマスは非常にいいイベントです。世界中の人が同じ日に参加するイベントはクリスマスぐらいしかない。日本だけ

ですが、バレンタインデーもそうです。環境に関しても「アースデー」がありますが、カッコよかったり、みんなが気持ち良いイベントをもう少し積極的に使っていて、いろいろな側面でいろいろな人がカジュアルに考えられるイベントができたらいいなという気がしています。

青木：ありがとうございました。観察と実践ということでお話いただきました。これまでの議論で、観察の場合、人間の側だけの視点で観察をするのではなくて、自然の側からわれわれはどう見られているのか、という違った視点での観察を入れていくということ。あるいは、時間軸を持って、長い時間の中でどういう意味があるんだろうかという観察の目を持って生きていきたいというふうに感じました。

実践に関しても、いろいろ挙げられました。いろいろなことができます。自分自身が納得して生きていくために、持続可能な社会をつくっていくためには、車1台買うのを延ばしてという話もありましたけれども、自分の森を持つことも大事ですし、週末に森の手入れに出かけることも大事です。日常の都会の生活で、家具一つ選ぶこともまた大事だったりします。ドングリ一つからでも実践できるということです。

一気に森に引越して生活をするのは怖いところもあります。でも、自分がスタートを切る1割になっていく。そういうメッセージを受け取っていただければと思います。必ずしも今すぐできるわけではないと思います。その時期はその人の中に生まれてくるのだと思いますが、失敗を恐れず、ソローの教えを生かしながら、自分たちを鍛えながら、良い生活を一緒に築いていきましょう。

